

小学1年1組 国語科学習指導案

指導者 藤原 さ り

音読を軸とした単元構成は、音読と場面の様子や登場人物の気持ちを想像することとがつながり、思考力・判断力・表現力を高め合うことに有効であったか。

1 単元名 声を出して楽しもう ～「たぬきの糸車」～

2 授業の構想

(1) 「大きなかぶ」を学習していたときのことである。授業の導入の音読で、おじいさんの台詞「あまいあまいかぶになれ。大きな大きなかぶになれ」をA児がとても気持ちをこめて音読していた。そのよさを学級全体で共有したいと考え、A児の音読を取り上げた。

T：(A児にもう一度読んでもらった後) 今、拍手がおきましたね。どうして？
C：だってね、「あまーいあまーい」ってのぼして読んでいたから、本当にあまくなりそうだと思います。
C：大きな声で読んでいたからいいと思いました。
T：どうして？
C：だってね、小さな声だったら、小さなかぶになっちゃうかもしれないから。
C：小さな声だとかぶが大きくなれない。
C：かぶの種って小さいでしょう。小さな声だと土の中にあるかぶの種に聞こえないかもしれない。
C：やさしくいっていいと思いました。
T：どうして？
C：おじいさんもやさしい気持ちだったと思うから。
T：どういうこと？
C：おじいさんも「大きくなって、おいしくなってね。」っていう気持ちでいっていたから。
T：おじいさんはどんな気持ちだったの？
C：「おいしいかぶになってね。」っていう気持ち。
C：「すっごくすっごくおいしくなるように。」っていう気持ち。
C：「どんなかぶになるのかな。」
C：「かぞくみんなでおいしく食べたいな。」
C：付け足して、「大きいかぶをみんなで食べたいな。」(後略)

こうして、A児の音読のいいところを見つけることが、ただ声の大きさや読む速さのよさの気づきにとどまらず、おじいさんの気持ちを想像することにつながっていった。この話し合いの後、もう一度全員で音読したところ、一人ひとりが気持ちをこめて音読する姿が見られた。

ここには、「おじいさんはこんな気持ちだろうな」と想像し(思考力)、「じゃあ、かぶの種に聞こえるように大きな声で読む方がいいな」、「『大きくなって、おいしくなってね。』っていう気持ちでいっていたからやさしい声で読む方がいいな」と考え(判断力)、実際に音読をする(表現力)という流れが見られる。低学年ではこのような姿を大切にしていきたい。こういう活動を繰り返すことによって、一つひとつのことばをただ何となく声に出して読むのではなく、ことばから想像をふくらませ、それに沿った読みがしたいという思考・判断を伴った表現ができ、そのことが読むことの力を高めることにつながっていくと考える。また、上記の例では、音読のよさを見つけるという話し合いが、おじいさんの気持ちを想像することにつながっているが、低学年ではこのような累積的な話し合いをすることが、かわり合いながら読みを深めることにつながっていくと考える。

(2) 本単元では「たぬきの糸車」(光村図書)を中心教材として扱う。「たぬきの糸車」では、いたずらものだが愛嬌があり憎めないたぬきと人のよいおかみさんの糸車を介してのあたたかい交流の姿が描かれている。文中の「いたずらもんだが、かわいいな」というおかみさんのことばが表すとおり、たぬきの動作や表情がリズム感のある擬態語(「くるりくるり」「びよんびよこ」など)をつかって表現されており、たぬきのかわいらしさをおかみさんとともに読み手も感じられるようになっている。ま

た、たぬきの台詞は一言もなく、たぬきの気もちは動作や表情の表現と、おかみさんの台詞や動作から想像することができるという仕掛けになっている。そのため、一つひとつのことばをもとに想像をふくらませながら読むことに適している教材といえる。今まで登場人物の台詞を中心に想像をふくらませてきた子どもたちに、台詞だけでなく地の文にある擬態語や擬音語などの表現にも目を向けさせていくことができる教材であるといえる。

「たぬきの糸車」は、伊豆地方に伝わる民話を元にしたものであり、「伊豆の民話」（日本の民話7 未来社）所収のものを岸なみ氏が1年生向けに再話し直したものである。そのため、「むかし、ある山おくに、きこりのふうふがすんでいました」という「時」「場所」「人物」を冒頭部で簡潔に述べる書き出し、「はあて、ふしぎな。どうしたこっちゃ」などに見られるおかみさんの語り口調、「かえっていきましたとき」という話の終わり方など民話の特色が随所に現れており、あたたかい雰囲気を醸し出すことにもつながっている。また、民話というもともと語り伝えられてきた口承文学がもとになっているため、声に出して読むことでより作品世界を楽しむことができる。したがって、「たぬきの糸車」は学級全体で読むものとして位置づけ、昔話へとつなげることができるよさもある。

本単元では、叙述から想像したことをもとに音読し、音読することでさらに想像をふくらませながら読む姿をねらっている。また、昔話へとつなげることにより、ことばのリズムなど昔話の特質に気づき、進んで読もうとする態度を育てることをねらいとする。

(3) 本単元では、読み聞かせによって昔話を聞くことを楽しむ立場と、幼稚園のお友だちに読み聞かせをするという昔話を声に出して楽しむ立場という二つの立場を経験することを通してねらいに迫りたいと考えている。

本単元では、中心教材である「たぬきの糸車」では登場人物の台詞だけでなく、地の文にある表現にも目を向けることができるように、「名人のようにおもしろさが伝わるように読もう」をめあてに本文に線を引いたり、想像したことを書いたりしながら学習を進めていく。

第1次では、読み聞かせにより昔話のおもしろさに出会えるようにする。本校3年生は、昨年度ペアで昔話の読み聞かせを行う経験をしている。その中から特に音読の工夫が見られたお話2つ「きつねにようぼう」と「だごだごころころ」に3年生のペアの読み聞かせにより出会わせる。そのことで「自分たちもあんなふうに読んでみたい」という気もちがもてるようにする。また「こんなふうに学習したんだ」ということが分かることで、学習の見通しをもつことができるようにする。次に、わいわいランドで交流のある附属幼稚園年長組のお友だちに昔話の読み聞かせをするということを知らせ、意欲がもてるようにする。

第2次では、「音読名人」の音読によって「たぬきの糸車」に出会わせる。ゲストティーチャーを招き、子どもたちには「音読名人」として紹介し、お話のおもしろさに浸れるようにする。そのことが「昔話っておもしろいな」「私たちも読んでみたいな」という動機付けとなると考える。そして、「名人のようにおもしろさが伝わるように読もう」をめあてに各場面の読みとりを進めていく。各場面では本文に線を引きながら読むことで、ただの印象ではなく、叙述に即して想像をふくらませることができるようにしていく。また、線を引いた部分はどこか、また、そのわけを交流する中で、おかみさんやたぬきの様子や気もちが想像できるよう働きかけを行う。書きこみ→交流→音読→ふりかえりという流れを繰り返すことで、子どもたちがかかわり合いながら読みを深めていくことができるようにしたいと考えている。また、友だちのよさを取り入れながら音読できるように4人グループで行う。4人グループで行うことにより、聞き手と読み手の立場の両方を何度も経験でき、音読すればするほど、想像もふくらんでいくと考える。各場面の読みとりの後、第1場面から第6場面をとおしての音読発表会を行う。

第3次では、第2次と同じ4人グループで昔話を選び、附属幼稚園年長組のお友だちに読み聞かせを行うための練習をしていく。昔話は、指導者があらかじめ選んでおく。昔話を選ぶ観点は①「たぬきの糸車」の「キークルクル キーカラカラ」のような擬音語が含まれていること、②会話文があること、③適当な長さであることとする。選んだ昔話は、絵本を用意し、本物の絵本を手元に置いて学

習を進めることができるようにする。これは、自分たちの力で読み進めていく上で絵が大きな手がかりになるからである。音読の工夫は絵本に直接書きこむことはできないので大きめの付箋を用意し、書きこんだら貼っていくようにする。発表は4人で役割分担しながら行う。

本時は、冬に村へ下りていた木こりの夫婦が、春になって山奥の一軒家に帰ってくる場面である。ここでは、冬の間たぬきが糸を紡いでいることを知らないおかみさんが、板の間にある白い糸の束や巻きかけの糸の残る糸車に驚き不思議に思う様子、糸車の音を聞き、驚く様子などについて想像をふくらませることができることばが随所にある。めあての確認の後、おもしろいなと思うことばや様子や気持ちが伝わることばに線を引く活動をする。そのとき想像したことを書き込んでいる子どもを認め、広げていくようにする。次に線を引いた言葉を交流し、音読に活かすことができるようにする。話し合ったことをもとにした音読の工夫が見られるグループを取り上げ、取り組みのよさを広げる。最後にふりかえりをする中で、「音読名人に近づいたぞ」という満足感や「次もがんばるぞ」という意欲をもって授業を終えることができるようにする。

3 活動展開計画（全12時間 本時6 / 12）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	読み聞かせを聞き、単元の見直しをもつ	課外 1	・「きつねによぼう」「だごだごころころ」に3年生の読み聞かせにより出会う。 ・自分たちも読み聞かせをしてみたいという意欲をもつ。
2	「たぬきの糸車」を声に出して楽しむ	2 3 4 5 ⑥～8 9	・「音読名人」の音読により「たぬきの糸車」に出会う。 ・1から6場面について「名人のようにおもしろさが伝わるように読もう」をめあてに本文に線を引きながら読む。 ・線を引いた箇所とその理由を交流する。 ・読みとったことをもとに4人グループで音読練習をする。 ・「たぬきの糸車」音読発表会をひらく。
3	昔話を声に出して楽しむ	10 11 12 課外	・昔話の題名とあらすじを元に読みたい本を選ぶ。 ・音読の工夫を書きこみながら読み進める。 ・学級の中でリハーサルとして音読発表会を行う。 ・幼稚園でお話の国（昔話の読み聞かせ）を行う。

4 評価計画

次	時	関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	国語科における思考力・判断力・表現力
1	1	昔話を、関心をもって聞いている。		昔話のおもしろかったところを書いている。		昔話の読み聞かせを聞き、昔話のおもしろさに気づくことができる。	昔話のおもしろさに気づき、自分でも読んでみたいという意欲をもつ。
2	2 3 4 5 ⑥ 7 8 9	名人のように「たぬきの糸車」を読みたいという意欲をもちながら学習を進めている。	自分の見つけた音読の工夫を発表したり、友だちの考えを聞いたりしている。		・音読の工夫を見つけ、線を引いたり、理由を考えたりしている。 ・叙述を元に想像することができる。	・文のまとまりに気をつけながら音読することができる。 ・助詞を正しく使いながら想像したことを書くことができる。	・ことばの一つひとつから場面の様子や登場人物の気持ちを想像することができる。 ・読みとったことを音読に活かすことができる。
3	10 11 12	昔話を進んで選り紹介しようとしている。	友だちの選んだ昔話を興味をもちながら聞き、感想を伝えている。	感想を手紙の形で書いている。	読みとったことを元に音読を工夫している。	昔話の読み聞かせを聞いたり、読み聞かせたりすることを楽しんでいる。	選んだ昔話をどう読むか考え、グループで工夫しながら音読している。

5 本時の学習

(1)ねらい おかみさんの動作や表情を表す表現をもとに場面の様子やおかみさんの気持ちを想像することができる。

(2)展 開

学習場面と子どもの取り組み	教師の支援と願い・評価
<p>1. 本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>めいじんのようにおもしろさがつたわるようによもう</p> </div> <p>2. 本時の場面を確認する。</p> <p>3. 音読の工夫を考えながら読む。 (1)線を引きながら読む。 すぐに線を引くことができる子→ 線を引いて手が止まっている子→ 線を引くことばが選べない子→</p> <p>(2)線を引いたことばを交流する。 ・あつ→すごく驚いたから大きく読むよ。 ・山のように→すごくたくさんってことだから大きく読むよ。 ・そのうえ→白い糸の束だけじゃなかったから、本当に驚いたと思うよ。 ・「はあて…」→たぬきのことは分かっていないから、すごく不思議だなあという感じに読むよ。 ・「キーカラカラ…」→離れたところから聞こえるから小さい声で読むよ。</p> <p>(3)線を引いたことをもとに音読練習をする。 ○4人グループで音読練習をする。 ○ねらいに沿った活動をしているグループの音読を全体で共有する。</p> <p>4. ふりかえりをする。 ・おかみさんが驚いたことが分かるように「あつ」のところが大きく読んだよ。 ・おかみさんはたぬきがしているなんてわからないからすごくふしぎそうに読んだよ。 ・○○さんの読み方は名人みたいでよく分かったよ</p>	<p>・この時点での自分の音読が確かめられるように声をそろえずに読むよう声がけをする。</p> <p>・「おもしろいなと思うことば」や「様子や気持ちが伝わることば」に線を引くよう声がけをする。</p> <p>・線を引くことができていることを認める。ただしほとんどに線を引いている場合は、その中で特に線を引きたいことばはないか問い返す。また、どうして線を引きたいと思ったか理由を書くことができれば書くよう促す。</p> <p>・どうして線を引きたいと思ったか理由を書くことができれば書くよう促す。</p> <p>・おかみさんの台詞を中心に線を引くことができなにか提案するようにする。</p> <p>・模造紙に教材文を書いたものを用意し、書きこみを全体の前でしながら学習を進めるようにする。</p> <p>・ことばの随所から場面の様子やおかみさんの気持ちが想像できるということを実感させるため、子どもの発表したいところから発表できるようにする。ただし、同じ箇所である場合は、続けて発表するよう促す。</p> <p>・発表するときは、なるべくどう読みたいかも実際にやってみよう促す。 例：大きな声で読みたい→実際にそのことばをどんなふうを読むか実演させる。</p> <p>・話し合ったことをもとに音読の工夫が見られるグループを捉えておくようにする。</p> <p>・取り上げたグループのどこがいいと思ったかを出し合うことで想像したことを音読の工夫に活かすということの具体的なイメージがもてるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>— 評価の観点(思考力・判断力・表現力) — 叙述をもとに 場面の様子やおかみさんの気持ちを想像し、音読することができる。 【評価方法：書きこみ、発表、音読の様子】</p> </div> <p>・「音読名人に近づいたぞ」という満足感や「次もがんばるぞ」という意欲につながるようなふりかえりになるようふりかえりの視点を「がんばったこと、できるようになったこと」と「お友だちのいいところ」の2点にしぼるようにする。</p>